

【書評・紹介】

『久摺』第 14 集

(釧路, 釧路アイヌ文化懇話会, 2016 年 11 月, A5 版, 243 頁, 税込 1,000 円)

中 村 和 之

本書は、釧路アイヌ文化懇話会が発行している雑誌である。誌名の「久摺」は「クスリ」と読み、釧路の古い呼び名である。現在、釧路川に架けられている橋で、河口から二番目の久寿里橋も同じ呼び名である。

釧路アイヌ文化懇話会は、1985 年に山本多助氏が北海道文化賞を受賞したことをきっかけとして発足し、2016 年に創立 30 周年を迎えた。この間、2003 年にはアイヌ文化振興・研究推進機構からアイヌ文化奨励賞を受賞している。

では以下に、本号の内容を紹介する。

- 山本悦也「『久摺』第 14 集発刊にあたって」
- 結城幸司「メナシウンクルという自覚」
- 大野徹人「阿寒湖でのアイヌ語学習 釧路方言への取り組み」
- 浅野恵子「アイヌ民族が先住していた」
- 福浦 寛「祖父 信太郎と白糠アイヌ学校」
- 島山歌子「カラフトアイヌの衣服 草皮衣」
- 山本悦也「石川啄木とアイヌ民族」
- 眞壁智誠「『日鑑記』オムシャ考」
- 千葉誠治「中学校の教科書記述に見られるアイヌ民族についての一考察」
- 大川哲子「カネランとは誰れか ―その実像を求めて―」
- 神戸忠勝「夷酋列像に関する、あれこれ」
- 杉山四郎「武四郎碑はどうあるべきか」
- 木内朝進「アイヌ新聞翻刻」
- 福浦 寛・島山歌子・山本悦也・中村一枝・高橋喜勢子・鈴木史朗「故桶作高子先生 追悼文」
- 森田幸教「地名に見るアイヌ民族の自然観 ―釧路地方を中心として―」
- 奥田幸子「イコトイ・シヨンコの『申口』1785 年 (天明 5)」
- 吉田邦彦「アイヌ民族補償の現況と課題 ―諸外国の先住民族補償 (とくにアラスカ原住民の場合) との比較で―」
- 権久慎介「アイヌ文化の復興とそれに関わる若者の力」
- 例会のあゆみ (第 271 講～第 335 講)
- 会則
- 役員・会員名簿
- 編集後記



研究会の雑誌という関係上、いずれもアイヌ民族に係わる論考ではあるが一つのテーマにまとまった内容ではない。各会員が興味・関心による研究の成果を公表している。本稿では、筆者の興味によりいくつかの論考を取りあげ、紹介に代えたいと思う。

まず結城幸司「メナシウクルという自覚」は、2016年8月7日に市立釧路図書館で開催された釧路アイヌ文化懇話会の30周年記念講演会での講演である。メナシウクルとは、東側の人という意味である。大野轍人「阿寒湖でのアイヌ語学習」は阿寒湖でアイヌ語学習を進めるなかで、釧路方言をベースに教えるにいたった理由や授業の様子を紹介している。浅野恵子「アイヌ民族が先住していた」は著者がこれまでアイヌ史について調べたことを、項目別に紹介している。福浦寛「祖父信太郎と白糠アイヌ学校」は白糠第二尋常小学校の初代校長を勤めた福浦信太郎(1864~1940年)に関する史料を紹介している。畠山歌子「カラフトアイヌの衣服 草皮衣」は、日川清氏が制作する草皮衣の紹介である。山本悦也「石川啄木とアイヌ民族」は、啄木のアイヌについての認識はエキゾチックなものに留まったと結論づけている。眞壁智誠「『日鑑記』オムシャ考」は、国泰寺がオムシャにどのように係わったかについては、時代によって変化があり、最初は会所で行っていたが国泰寺で行われるようになり、さらに会所で行うようになったことなどを論じている。木内朝進「アイヌ新聞翻刻」は、高橋真(1920~76年)が1946年3月から47年5月までに、号外をあわせて15号発行した『アイヌ新聞』の翻刻である。旧字体を新字体に改め、さらに現代仮名遣いに改めている。筆者は、『アイヌ新聞』の引用を新谷行『増補 アイヌ民族抵抗史』(三一書房 1977年)で目にしたことがあるが、まとめて読むのは本論文が初めてである。貴重な史料紹介であるが、仮名遣いの変更があるため、人によっては原典にあたる必要も出てこよう。本論文158頁に引用される『アイヌ新聞』第3号所載の山本多助氏の署名記事は、『増補 アイヌ民族抵抗史』233頁にも引用されているが、僅かに違いがある。まだ第3号までの翻刻であるから、今後も連載が続くものと思われる。将来、原典の所蔵先をあげていただけると、読者には有益であろう。奥田幸子「イコトイ・シヨンコの『申口』1785年(天明5)」は、田沼意次による蝦夷地探検隊によるイコトイとシヨンコからのアイヌ語の聞き取りを扱っている。『蝦夷地一件』に収められている原典はカタカナでアイヌ語を表記し、逐語訳を付している。本論文では、ローマナイズと日本語の逐語訳、それに日本語訳を提示しているので、アイヌ語がわからない読者でも理解できる。この申口の内容が、未完に終わった田沼探検隊の報告書というべき『蝦夷拾遺』の内容とどのような関係があるのかなど、興味が尽きない。吉田邦彦「アイヌ民族補償の現況と課題」は法学者の立場からアイヌ民族への補償の問題を論じたもので、多岐にわたる事例をわかりやすく紹介している。ただ筆者は、著者が先住民族と原住民という用語を、どのように使い分けているのかわからなかった。椎久慎介「アイヌ文化の復興とそれに関わる若者の力」は、2015年4月例会第320講の報告の筆録であり、フィンランドを訪問してサーミの若者委員会の活動と出会って以降の筆写の活動が紹介される。アイヌ民族の若い男性の活動の記録としても、興味深く読んだ。

最後に個人的な話で恐縮だが、筆者も1998年から2001年まで釧路市に居住していた時には、釧路アイヌ文化懇話会の例会に加えていただいていた。例会の報告者を仰せつかったこともある。同会の今後のますますのご発展を祈念して、結びとしたい。

(なかむら・かずゆき/函館工業高等専門学校)